

普及現地情報

接ぎ挿し技術によるイチジクの優良苗木生産

J A兵庫六甲神戸西いちじく部会では、老木化やネコブセンチュウによる生産性低下が問題となっていた。「柵井ドーフィン」自根苗による改植では、いや地等により十分改善されなかった。そこで、強樹勢品種「Zidi」を台木に活用した接ぎ木苗の産地内生産・供給体制整備に取り組んだ結果、既存園の改植が進んだ。

背景

J A兵庫六甲神戸西いちじく部会は、老木化による生産性低下の対策として「柵井ドーフィン」自根苗による改植を進めていたが、いや地の影響で生育が抑制され、十分な改植効果が得られず、対策が求められていた。また、土壌病害の持ち込みを防ぐため、産地内での苗木生産体制の構築が必要であった。そこで、強樹勢品種「Zidi」を台木に活用した接ぎ木苗による改植に向け、2019年度から農業技術センターと連携して、産地内での苗木生産体制の整備に取り組んだ。

内容

1 育苗体制の構築

構築した育苗体制は以下のとおりである。

1月下旬に「Zidi」の1年生枝(約15cm)に「柵井ドーフィン」穂木を切り接ぎしたものを、培土を充填したポットに挿し木する接ぎ挿し法^{*}を行う。接ぎ挿しした苗は4月下旬までJ A兵庫六甲の加温施設(西区)で一次育苗した。

5月頃に一次育苗した苗を供給すると、生産者は長期間管理する必要があり、^{かん}灌水不足や生育のばらつきのリスクがある。そこで、関係機関と調整し、2021年度から「神戸フルーツ・フラワーパーク」(北区)へ輸送し、10月下旬まで無加温ハウスで二次育苗するリレー育苗を行った。これらにより、既存の施設を活用しながら、生育が揃^{そろ}った苗木を安定供給することができた。



図 構築した育苗体制

2 接ぎ挿し法を用いた接ぎ木苗育成のポイント

苗木生産の取組の中で分かったポイントを以下にまとめる。

(1) ポットサイズと培土

台木の太さや挿す深さ、挿し木後の生育等の観点から5号ポットを使用する。培土は、肥料成分により土壌中で台木の表皮が剥がれ発根性が悪くなる場合があるため、無肥料培土を使用する。

(2) 挿し木の深さ

挿し木の深さがばらつくと、発根とその後のすべての生育に影響が生じる。予め挿し穂と同程度の太さの棒で培土の中心まで穴を開け、挿し木の深さを一定にする。

(3) 一次育苗時の温度、湿度、灌水管理

初期生育を確保するため、加温施設(夜温18℃以上、日中20~30℃)で管理を行う。萌芽までの期間(挿し木から2週間程度)はトンネル被覆(写真1)により内部湿度を保ち、^{ほう}

灌水頻度を抑えつつ、萌芽を揃える。灌水は培土の乾燥状態に応じて毎日～3日おきに行う。

(4) 二次育苗時の灌水

ポットは直接地面に置かず、防草シートを敷いたパレット上に設置する。移動・鉢上げ後は点滴灌水(1L/日)と手灌水、夏場は6L/日(2L×3回)の点滴灌水を行う。水分ストレスを与えず生育させることで、最終的に1.5mを超える1年生苗が生産できる(写真2)。



写真1 トンネル被覆の様子



写真2 二次育苗中の接ぎ木苗

今後の方針

市内施設を活用した接ぎ木苗の生産技術・供給体制を整備したことで優良苗木の安定供給が図られ、これまで730本の苗木が供給でき、既存園の改植が進んでいる。また、苗木の配布時には講習会を開催し、植付け時の留意点などを生産者へ伝えているほか、実証圃（は）の設置、定期的な関係機関による導入園の巡回や生育状況調査を通して、改植の効果を確認している。今後は、既存生産者だけでなく、新規参入者への園地継承につなげ、園地とともに産地の若返り・拡大を進める。

※接ぎ挿し法：台木に穂木を接ぎ木した接ぎ穂を挿し木すること。

接ぎ挿し法による接ぎ木苗の育成手順については、本誌2023年5月号参照。

石崎 初音(神戸農業改良普及センター)